

公社債市場動向 (2020年6月)

大和証券 金融市場調査部

【概況】6月の国内債券市場は、前月から引き続き超長期ゾーンを中心に金利上昇し、カーブはスティーピングした。7月に控える国債の大増発、そして7月の日銀オペ方針でどれほどの買入れ額増加が示されるかが相場の焦点となった。海外要因として、米国内での感染第二波の拡大が米金利の低下要因となったが、米金利と国内金利の連動性は低く、国内の超長期金利の上昇がことさら目立った。

【6/1-5】：1日は、日経平均が2万2000円を回復するなか、前月末に公表の日銀オペ方針にて超長期債の買入れが増額されなかったことで、超長期債中心に下落。JGB10年は0.005%に上昇。2日、米国での大型起債に伴い米債は下落したが、この水準では買いも入り、JGB10年は0.005%で変わらず。3日は株式がさらに上昇し、リスクオンムードが相場を支配する中、JGB10年は0.010%に上昇。4日、米経済指標が改善の兆候を見せたほか、30年入札も低調な結果となり、JGB10年は0.025%に大きく上昇。この日の海外時間、ECB理事会でパンデミック緊急購入プログラムが強化され、リスクセンチメントが改善すると、海外金利がスティーピングしながら上昇。5日の国内市場でもこの流れを受け継ぎ、JGB10年は0.045%に上昇。

【6/8-12】：8日は、前週末に発表された米5月雇用統計で、非農業部門雇用者数変化が前月比マイナスになるとの予想が太宗を占める中、結果は予想外のプラスとなり、リスクオン傾向が強まった。しかし、債券は動きに乏しく、JGB10年は0.045%で変わらず。9日、米国市場で株買い・債券買いのゴルディロックス的な相場展開が続く中、JGB10年は0.015%に大きく低下。10日は、日銀オペが若干甘い結果となり、JGB10年は0.020%に上昇。11日、前日海外時間のFOMCで現在のゼロ金利政策が2022年末まで続くとの見通しが示され、米金利が低下していたことを受け、JGB10年は0.005%に低下。12日、海外金利の

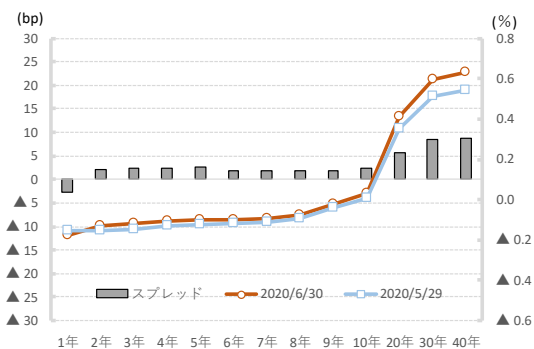
低下に反して日銀オペは甘い結果となり、JGB10年は0.010%に上昇。

【6/15-19】：15日、ここまで上昇を続けてきた株式が調整したことで、債券は買われた。JGB10年は0.000%に低下。翌16日、前日米国時間にニューヨーク連銀から個別社債購入開始の発表があったことで、リスクオンの展開に。JGB10年は0.015%に上昇。17日、債券は動意が薄く、JGB10年は0.015%で変わらず。18日、株が再び軟調な展開となり、JGB10年は0.010%に低下。19日、株式が引き続き軟調に推移する一方で、次週に控える20年入札への警戒感もあり、JGB10年は0.010%で変わらず。

【6/22-26】：22日、日銀オペが若干強い結果となり、長期債は上昇。JGB10年は0.005%に低下。23日、米中通商交渉をめぐるナバロ米大統領補佐官が「終わった」と発言したと報じられると、株安・金利低下となったが、その後すぐに否定コメントが入ったことで、相場の流れが巻き戻った。JGB10年は0.005%で変わらず。24日は、20年入札を翌日に控え売り圧力が強まった。カーブはスティーピング化し、JGB10年は0.010%に上昇。25日、20年入札は好調な結果となった一方で、スティーピング化圧力は引き続き強く、JGB10年は0.010%で変わらず。26日は中期債の日銀オペが好調な結果となり、JGB10年は0.005%に低下。

【6/29-30】：29日、前週末の海外時間米国での新規感染者数の増加ペースが再び加速しているとの懸念が株式の大幅下落を招いた。一方国内債券市場は閑散としており、ザラ場では1年7か月ぶりに取引不成立となった。引け値ベースでは、JGB10年は0.010%に上昇。30日も、7月の長期国債買い入れ月間予定の公表を控えながら債券相場は軟調な展開が続き、JGB10年は0.025%に上昇して月内の取引を終えた。

■ 図表：月末からのイールドカーブの変化



出所：Bloomberg

■ 図表：長期金利の推移



出所：Bloomberg